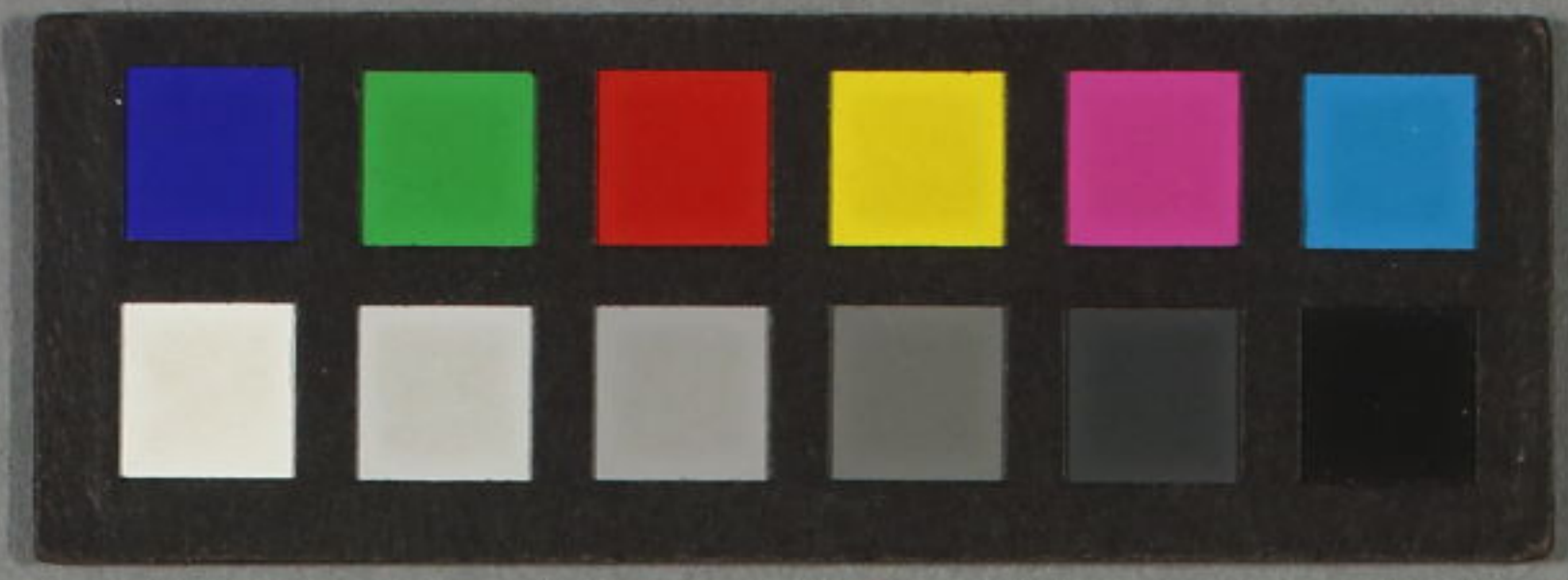


教訓裁まり

仁9  
1.364





序

道いちのちのまふあ

里やせ事いの易あきふ

あり見こやまの紀

かた文章ぶみの身こ小

切ちつたる教戒けい試

門もん口く  
番ばん 1.364  
巻まき



漢かんくひろ拾しゅうひひ集あつめ

小冊せうさく小編せうへんとと松しょうまま

也や全ぜん也や題だい一いつと

常じょうよよ懐くわい少せう人じん

高田重克

宋丞相文天祥語

忠

上じやう事じ於に君きん  
下げ交かう於に友ゆう  
内ない外がい一いつ誠せい  
終しゅう能のう長ちやう久きう

# 孝

敬父如天  
 敬母如地  
 汝之子孫  
 亦復如是

宋丞相文天祥

子者いすゝめ五篇

此は換の仰わらふことくきて

使ふは志やうだんとせむとやうして

とやう仰うて用とすまは

その子とせむとすれは我は

せむとせむとせむとすれは

何れもいとせむとせむとすれは

人と申ふとせむとせむとすれは

大にといふとせむとせむとすれは

男女のけしきとせむとせむとすれは

右 孝永庚子孝長何某の

子者一あふ

堵庵出

孝

二

守

侍衆の上とバ兄とくやまひて

下き身とこひわりきり

後といひは実あつて

おそき者うごりぬすまは

あつてむといひは実あつて

幼きものかろり

右ハ女成長のまごん  
子ども仲(ま)まきけゆ

子島伝拜

芝新柳



河内の西園寺村

芝氏十年の息

忠柳八女して

よくあつて

かよひて

おそき者

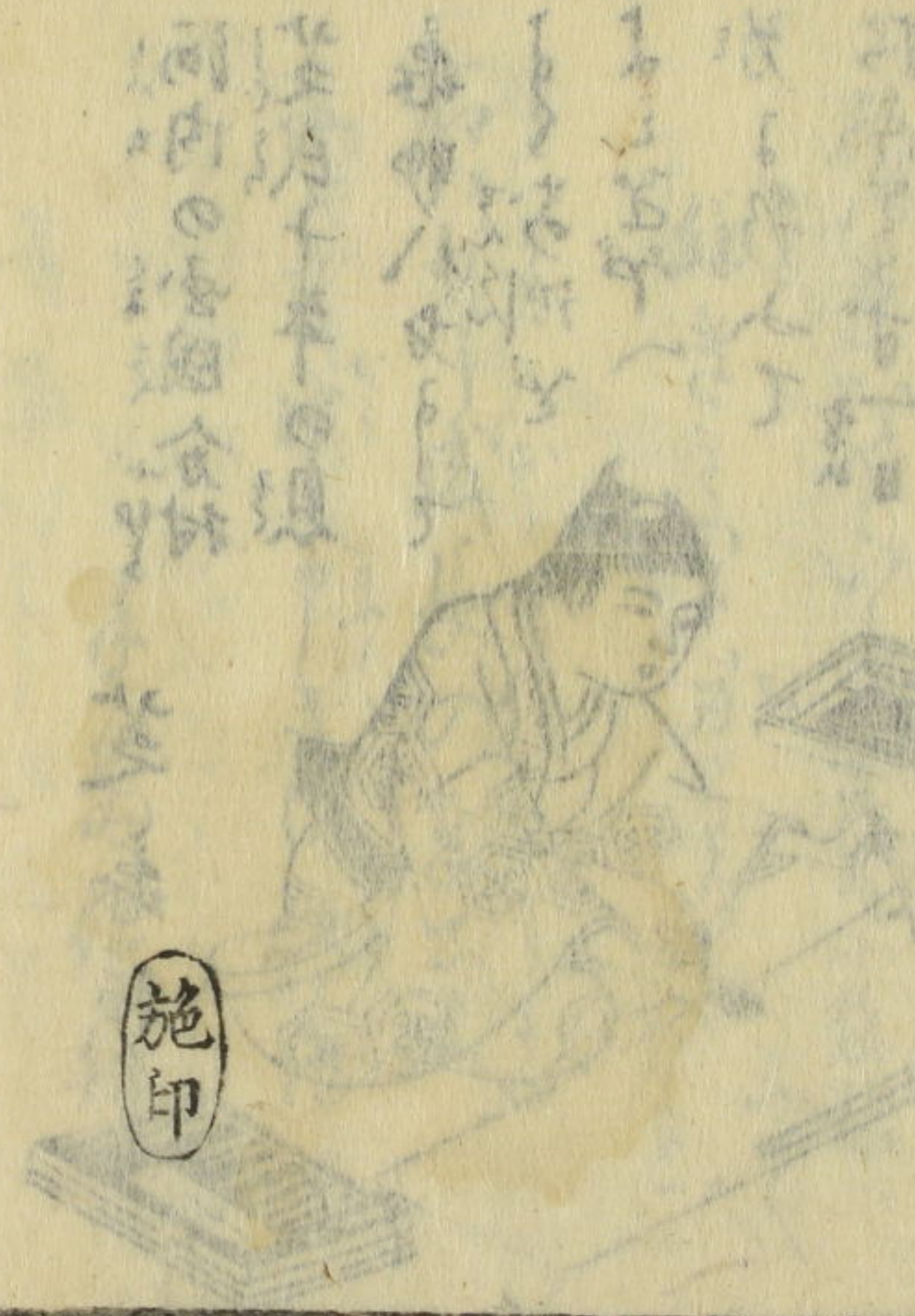
自かひあつて

て是とすれ

具云と曰

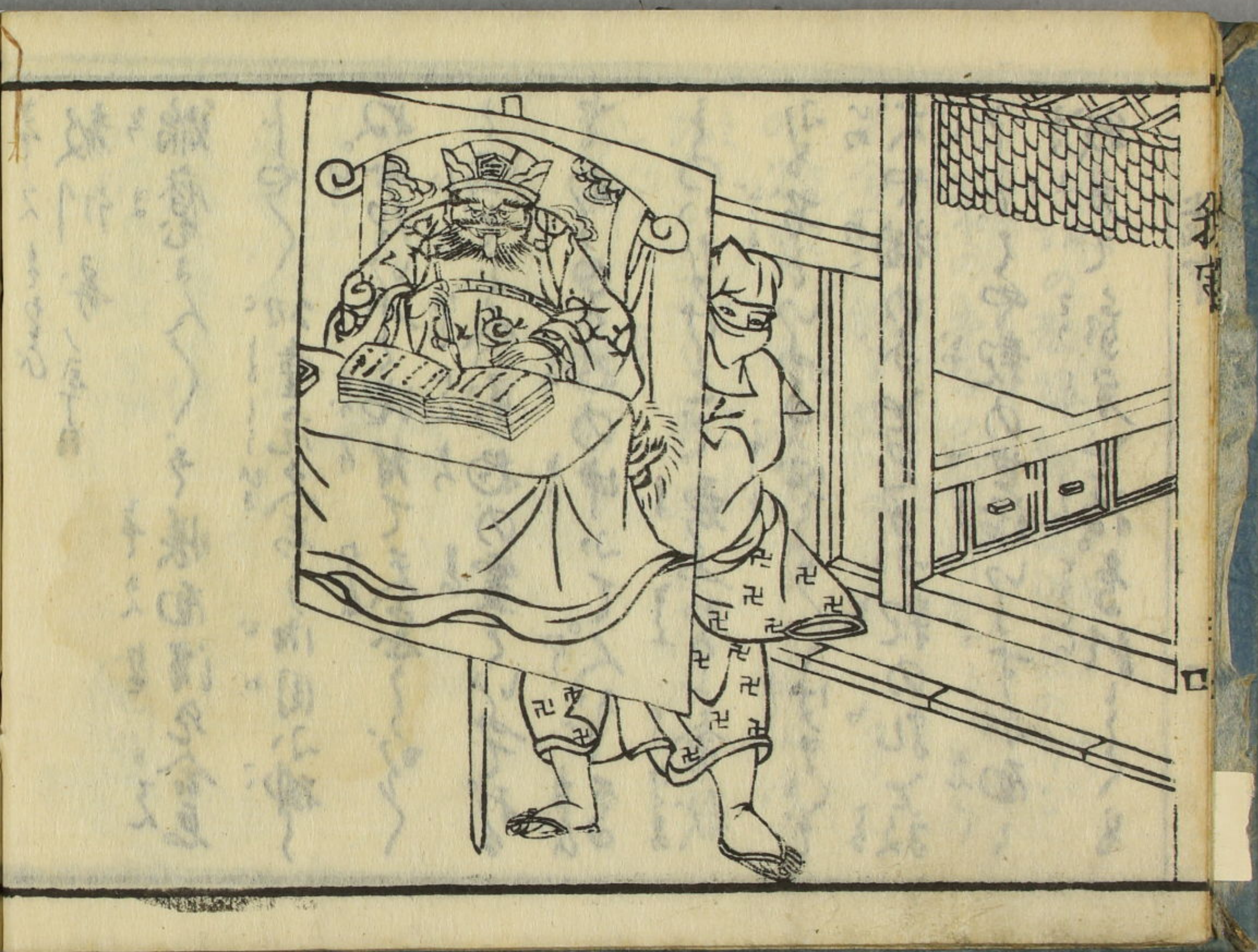
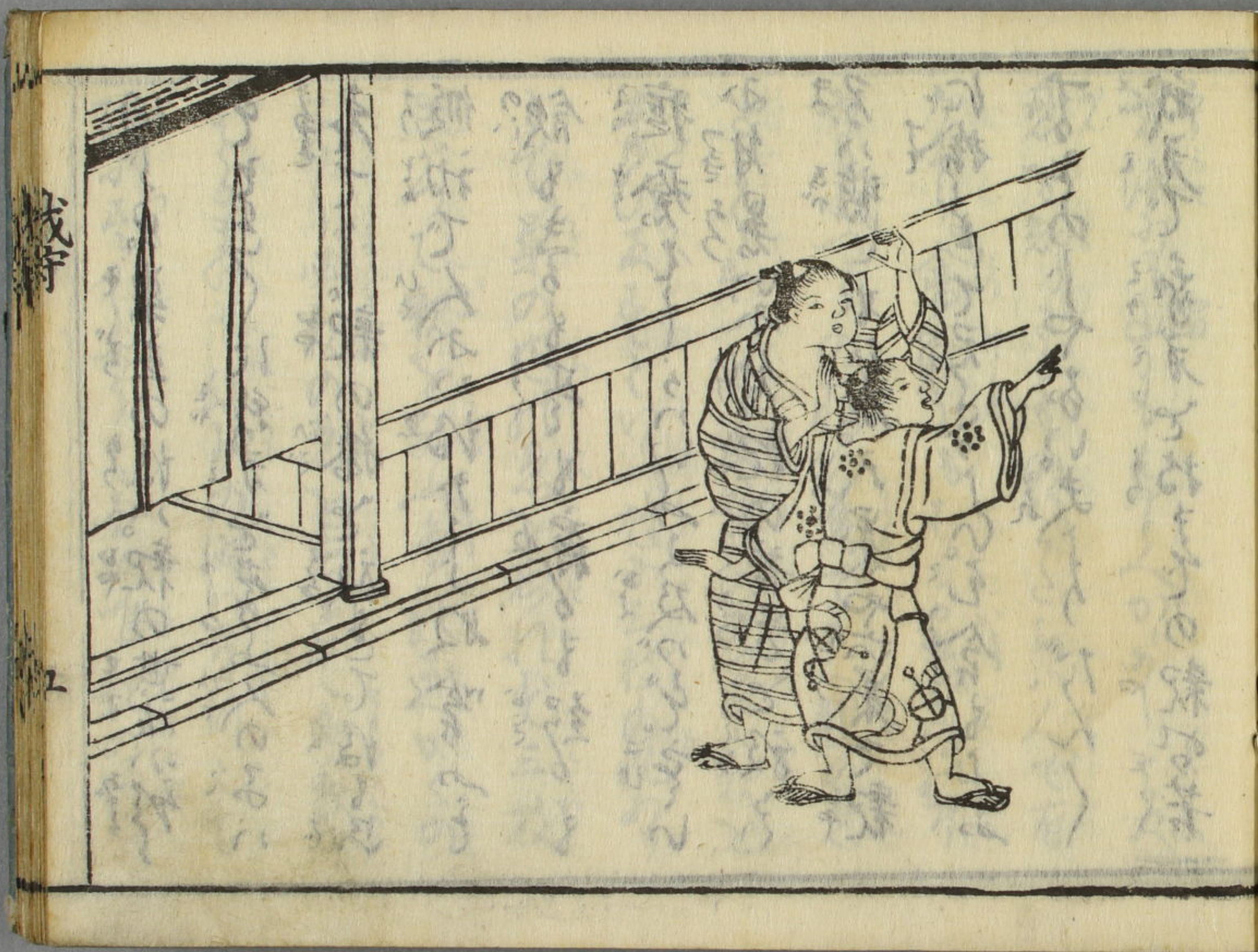
人し生れあつてはかやこりくのは  
なりよまれば天くくくとむるこ  
ふ者よまれば神佛のぼちあつて  
なりよせのハ大猫もかまひて

凡一切の教誨初若愚童の外は  
 八景の帝子の神聖の靈の  
 不舎り徹り先入の言主たる  
 の先賢の徳をふべし幼稚の  
 法より不く若道はかれまじ  
 あ州を益あり



きや久きわをい  
 教訓弄ノ式丁目

始磨さんくや帳面消え念息  
 ドやく幼童元久きわをい  
 ぬきだいで培付て天窓うづりく  
 と嚙ぞよ人の影の霊といふてわ  
 やわりのゆの申ふて人をとる  
 ものいなきまご。あつあつと會黙  
 小も若といふゆ必ずくはまじ  
 大や猫の子とるふ親の乳と教  
 くと。とや親の世活けす小面  
 我身で家身と持。ちんちんくも



何れも。果立の故ハ親の世話ハ  
 ぞとましくに親ガと云ふ人の子ハ  
 産て。親の徳と放まて後ハ只  
 假初で人ハ何れも。ぬ喰も  
 飲もきりも。病も起りも  
 瘧瘧と。うハい。及び。さ  
 不肖。親の苦勞と致す  
 男ハ。入果や。果で親  
 に捨て。合も  
 す。その。や。い。ま。り。だ。ん。く  
 我ガ。と。持。ま。で。の。親。ガ。苦

方海。山も。人。が。く。大  
 君と。知。さ。る。の。ハ。人。で。有  
 かな。金。銀。も。も。の。場。を。知。り  
 かも。小。づ。の。情。い。馬。で。親。の。恩  
 と。知。つ。て。及。舗。の。孝。と。親。と  
 孝。の。及。と。い。の。情。ハ。三。校。の。れ。わ  
 と。果。の。因。れ。君。と。忘。れ。ど。三。校  
 さ。ら。て。親。と。親。ガ。孝。と。い。の。の  
 ぞ。必。親。の。恩。と。忘。ま。て。孝。也。ハ  
 ち。の。孝。と。知。り。の。時。ハ。孝。也。と。て  
 研。不。孝。と。や。り。も。か。い。唯。親。の。作。と



かなぐと流くと横姫の虚云つ  
 のねがまろ孝行。ねほくの幼童の  
 ハ穴市かこしてはふもわきど必  
 立りてふるも思ひぞ童のとれ  
 の痕ハせ長小成ても除ふくいサ  
 さいとと曲と樹ハ大木小成ても  
 曲で岳の穴一終小將奕おる持  
 奕がかりどてハ何おたりも初れ  
 ぬ。強いよのどや。ね又ねべきハ  
 喉は海。町人百姓の喧嘩は海  
 何ふでも勝と負ドや持おとさ

ぶりの喧嘩ハ紫ねど。無言が通るバ  
 けて通。一は何ゆも負てわくと  
 務ぶ方の務とてんか。ね又帯と  
 用んすまきの性我。性我わやまらハ  
 ちあともめてもそのハひりもわい  
 必死あはれど必殆事とせど。あぐ  
 ともはくハ。必大うおるが。んあゆハ  
 わらて性我あり。性我さ。たり。或ハ  
 人小以。苗。喧嘩の出。あも。弓。わ  
 事。喧嘩は海。性我。は。り。け。親  
 の言。以。痛。款。の。ん。と。若。第。一。の。若

あり。附小童子の姪我るハ一生に集  
 行るもわり用かせよバあしぬるまや。  
 叔又人ふまきぬるや人小隠を事  
 知どハ必くせぬ物トや隠す事ヤ  
 いまあすおハ能るのなりのどや。  
 ようわとあハこそ人かも隠せぬ  
 人か隠せぬも我ハ人ふ隠されぬ。  
 能るハ人ト知り。惣ハ惣と知る。  
 先と比知の天知りも始慶大王も  
 以。又帝後の後とも不明かりのどや。  
 惣ハ人かぬどや合点ツク

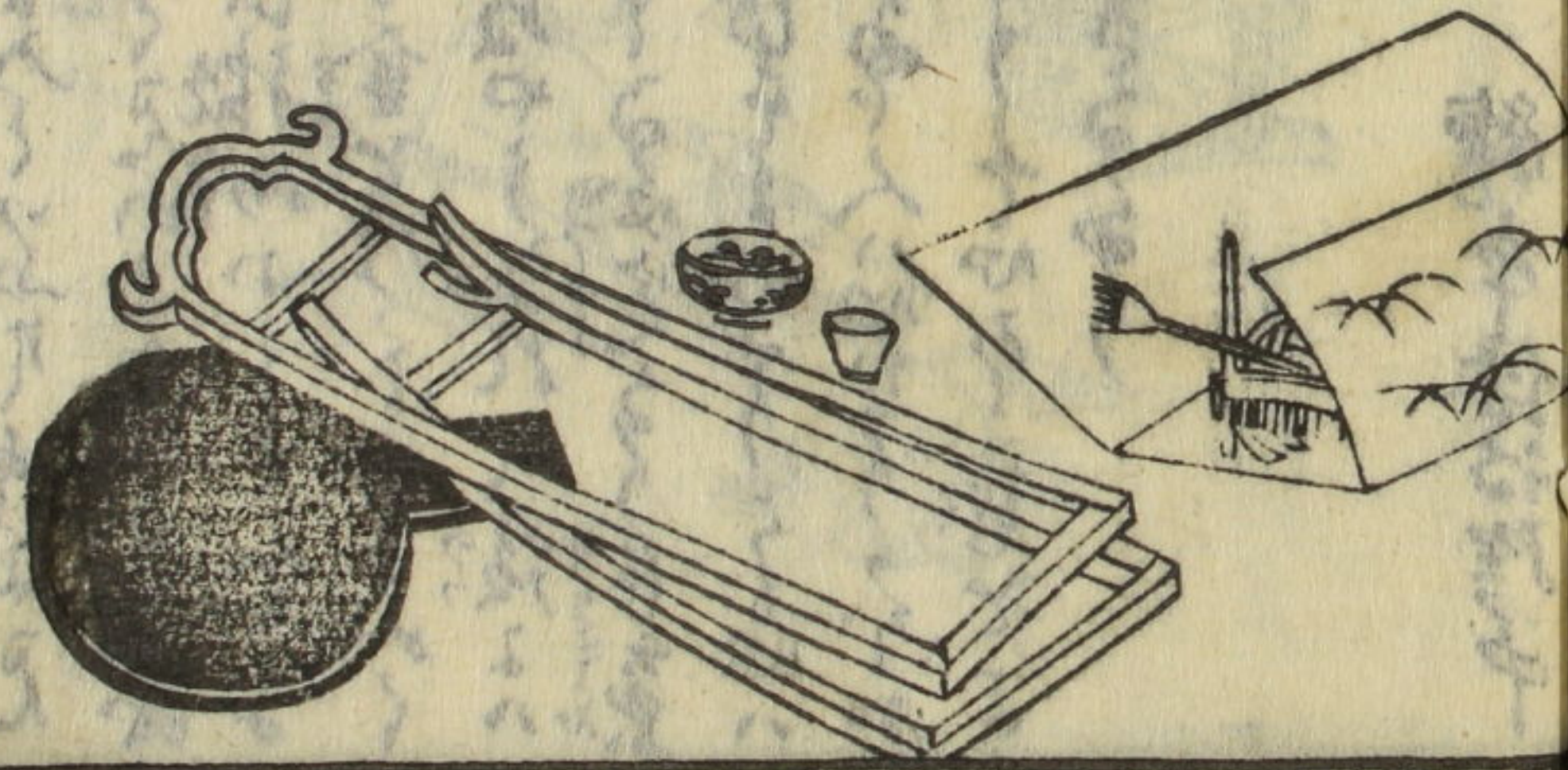


花丸  
 堀れ  
 又  
 さく  
 嬢  
 度  
 いた  
 ころ

年々歳々花柳似聚々年々人喬  
 花根根ぬれ九十九毎々八嘆あり  
 人の花は似て中葉以後八年くおとし  
 ろある世のこの老が不定の想は  
 うさへねと後一とたり我も人も初ぬ  
 小いあしねと後ふくおは父母も好余  
 うさへ三木の骨てけいさしと天も玉え  
 凡のりちあせりと童子にいづり今我  
 香い楽と保てり人の命はあまも  
 世のあまれば忽思ひのやぬるまよ  
 ことあともかまふくは梅丸益有る  
 只此の志とてげは今日をうりつうる日  
 ありと思ひとる一とそちあま

又  
 今日しのおひて飛ぶはうへ  
 世の中れえらるる成らんくも  
 ちけそ飛ぶは移んごうよせま

髪と  
 志ま  
 心  
 娘  
 子  
 女  
 子



佛教は女人と指す外に善菩薩は心  
 心夜母の心と云也怒首と云うが心  
 らんまの肉と云ふ事なり  
 文ねく眉月と云ふ事なり  
 ひまかたふたふたの心なり  
 さふくまて一人の心なり  
 とてこころ一又ふたふたの心なり  
 けまねの心なり  
 りの心なり  
 尚存の心なり  
 突ふく心なり  
 の心なり  
 花の心なり  
 こちの心なり  
 くちの心なり

繪本倭活中

何がと  
 たが  
 あら  
 いま  
 ね  
 ーや



親の思

友親の思  
 父母にけさる  
 母ハ比  
 天を父に  
 子なり  
 父ハ天なり  
 中まわく

校

地なる母は 父を以て 十月の娘

は世へは 赤子の泣き ありしれぬ

ありしれぬ 母の思 言はずもあか

しくおれど 言はずして 父の思

母よりすれ 言はずしけ 知りぬし

きずしして 左疾へぬ 科どし

父は天をて 言はずし 母は地をて

又へやすし 天はさちふ わりしす

地はさちよ わりしれて 昔子の思

いちきり 父の昔言ハ くるりおて

まゝの子はね 母よりも 子孫のためか

業を多し 母の思と ありしりて

行ふとけい 引まはり ちかちか

力持まで 言はずしよ 氣あつし

先子やふ ありしり ね給ふ

子とぞし 言はずまば 書と子の

言の思と 神かとけ んのうらふ

たのめとも 人めと知て 顔つとと

葉ぬむ 世るハ 葉のこのと

つゝの 胸の思ハ だましり知

子と母とをわかれざる  
 ありしに 母はなほ かくいふ  
 おひめが 味ひて 母にまはる  
 父人の 心のいふ こといふ  
 孝れども やむやう なるがう  
 その実れ ぶきなるが けぞらて  
 身ふりあて ぞくし なる父母  
 うかれど 歎かえと 知らぬあり  
 唐のむね その國ハ 母のまはる  
 こといふ 父と母と いかしやむ

歎ふちこそ ありまじと 習はるの  
 きいひの 英國こそ 是非かけ  
 け日中の ことハ 父母とて

父人と ぞくまひ 母人と  
 又おぼし かくして まいり  
 子どもま かくいふを 母の身

母とをさバ わやまうよ 月日のこ  
 かりなき こといふね 親の  
 世君はさく ぶつたれば 海山とて

他もつげ かくらぬれば たとへば

他もつげ かくらぬれば たとへば

孝行ぞり 志すべしハナリ

天ハ心すかり父のこゝろをたたり

身ハ地おして母のこゝろを

天と地父母の介我ハなく

心とおせバお孝とぞあり

塔庵

同或回舎小孝子一何り 甚

貧窮の人かりし親を孝小

死せんとする時孝子一甚云いし

く我死せば念以ふわつく甚

屋一葬礼小ぎやうに頼むよ

いひける孝子使くうけあひし

の山ありしをこれおて漸かちく

と世とまじりし小どの山と書て

親のやこれおとく小ぎやふ甚

礼一我身ハまのらちと身おて

かせがたまひし一將てかせがたまひし

の賣一山も賣りどしけると

なり

右の親のごころりし時をいして





もたぐ何すう賣りのなく

深方の孝子ありは時ハい

とくさいふもわつく葬れす

とけわハ親と係ふなるされ

とて一海の女覚も出来け

あこむれかういふせんや

手島先生言曰との時いふも

けわぬ一孝も賣られ

わり我ハそれとよりく葬れ

わつくすむ一とより物とい

病者あり書わハ書だけり

このぬ一まづもあふて今

の書そくれとある人お

のそそけとけう忠仲ハ

火もけがきわれが又十日の

出ぬと下されと後ハ

まを一せいなるに成とも

出つる下すま一介ハ何も

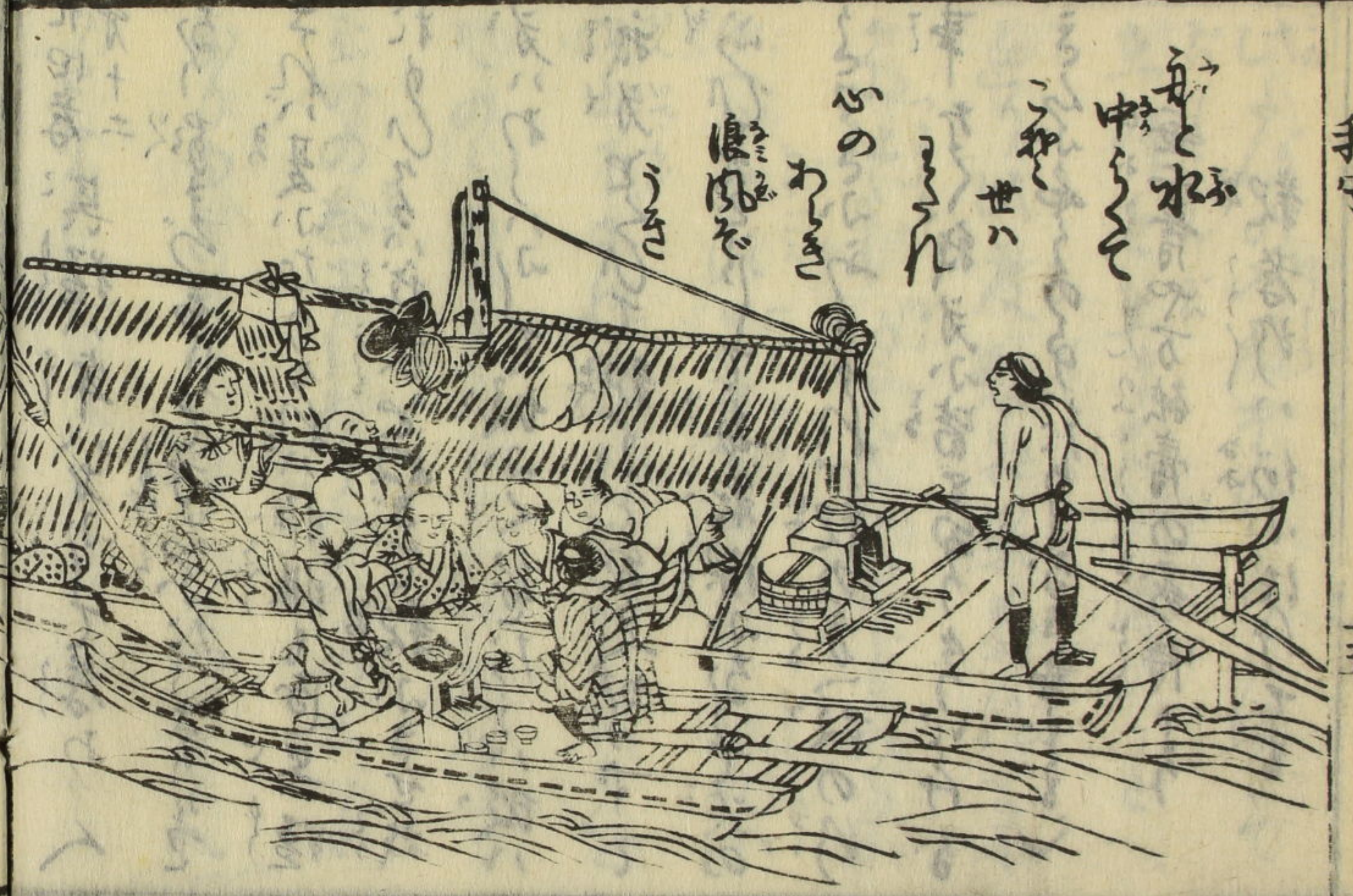
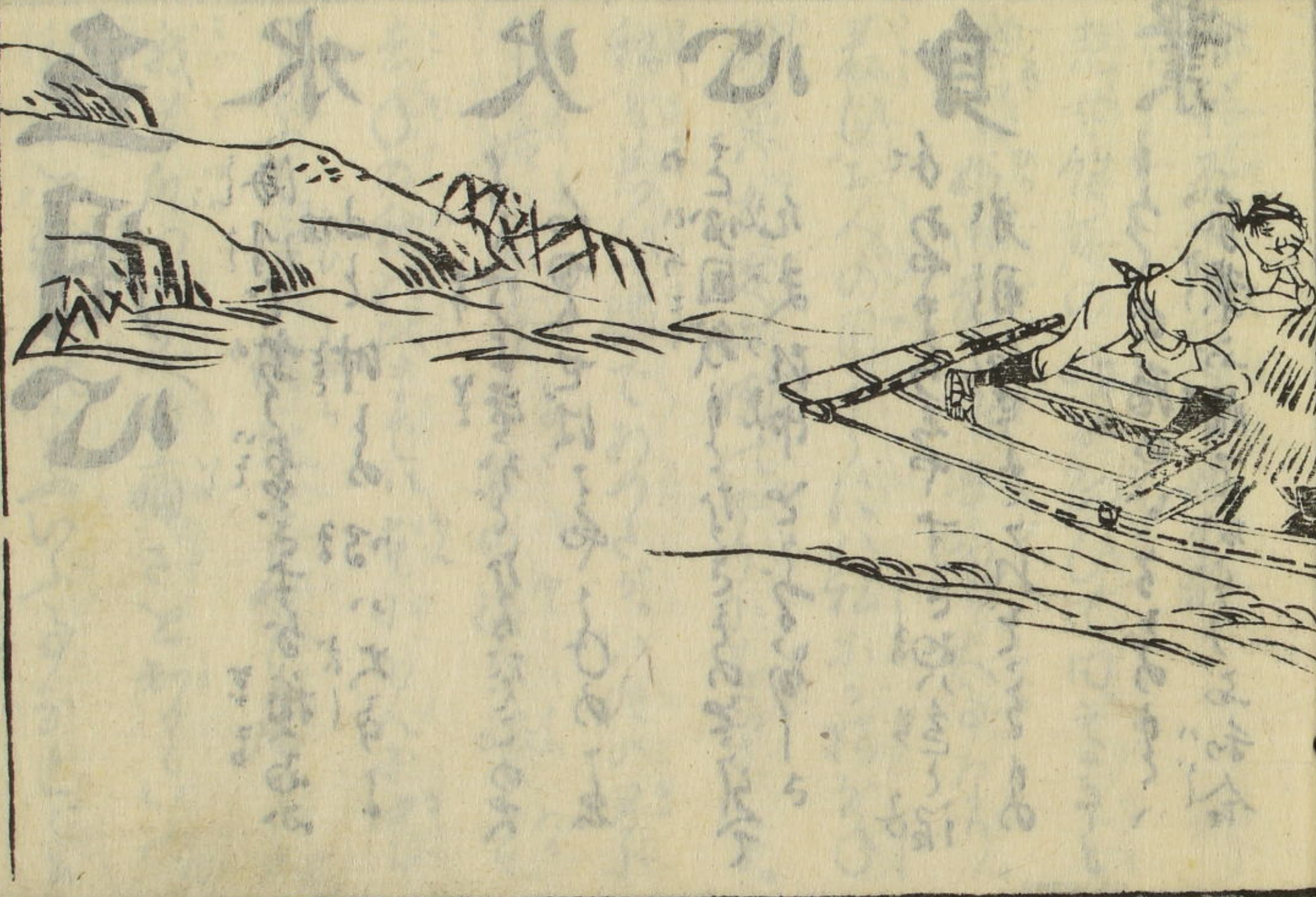
た一はは度の葬れの入用

だけぬが下されとい

けさびの入用がけりうけさて  
おしきんまゝに所を止まで別條のこゝへ  
白うけ度親お果養乳ふま  
ふ仕へし何とぞつかじこのふ  
け(ハ)を流(コ)苦言(カ)を(キ)養乳(カ)  
出(シ)下(サ)され(シ)と(ト)と(ト)と(ト)と  
たのむわりくべし是(ニ)ころ(ニ)つ  
まいの志(シ)ざ(り)わり(に)け(の)志(と)  
ありゆきと(と)かぬ(こ)ゆ(は)せん  
う(と)か(り)

廿四孝 吳猛八年八月にして孝なり人  
才十二 ありおまづあきて百(百)ふた(ふた)ざり(ざり)を  
され(は)夏(あ)ふ(ふ)たり(た)れ(れ)バ(バ)惟(た)帳(じやう)も(も)遂(つ)呉(ご)猛(まう)  
れ(れ)の(の)ひ(ひ)かり(かり)我(わ)衣(い)を(を)ぬ(ぬ)ぎ(ぎ)て(て)親(おや)ふ(ふ)ま(ま)せ(せ)我(わ)  
が(が)わ(わ)り(り)ハ(ハ)引(ひ)て(て)坂(さか)ふ(ふ)く(く)せ(せ)だ(だ)ら(ら)バ(バ)坂(さか)  
我(わ)が(が)と(と)く(く)ひ(ひ)て(て)親(おや)ふ(ふ)と(と)申(まを)ふ(ふ)が(が)す(す)と  
心(こゝろ)ひ(ひ)失(し)た(た)ら(ら)し(し)て(て)毎(まい)敷(し)裸(はだか)お(お)り(り)て(て)又(また)の  
う(う)と(と)ふ(ふ)ふ(ふ)し(し)た(た)れ(れ)バ(バ)親(おや)の(の)方(かた)坂(さか)の(の)り  
事(こと)なく(く)我(わ)が(が)ふ(ふ)皆(みな)さ(さ)り(り)多(た)り(り)い(い)は(は)る  
と(と)ふ(ふ)ふ(ふ)の(の)り(り)た(た)り(り)か(か)ら(ら)し(し)事(こと)と(と)し

無二膏(むにこう)や万能膏(ばんのうこう)の膏(こう)特(とく)し  
親(おや)孝(こう)け(け)ハ(ハ)何(なに)も(も)仕(し)け(け)て(て)も



舟

舟

舟

舟

舟  
中  
水

舟  
中

舟  
中

舟  
中

舟  
中

舟  
中

# 五用心

水

海川で流るる水は身を流すは  
山と川と水は流るる水は身を流す

火

火は燃らすは身を焼くは  
火は燃らすは身を焼くは

心

心は思ふは身を動かすは  
心は思ふは身を動かすは

身

身は動くは身を動かすは  
身は動くは身を動かすは

業

業は成るは身を動かすは  
業は成るは身を動かすは

儉なむやとて嫁姑の如

老女嫁取の嫁小むいて曰。そ。ま。ま。も。

儉も娘取前ハ唯幸抱が大むなり。

義いふ人の目々には私ホウ極をひ

義と六世後の姥此やう小もふさ人が。

私も義い嫁であつとが。いほの男小

や。姑小なり。そ。ま。ま。の。嫁。を。嫁。が。有。

去子の秋れ此をいふが。か。ん。小。中。が。

ころあて。速小。後。死。と。も。や。一。休。一。と。

我力仇つて人の痛さと知をいふ。

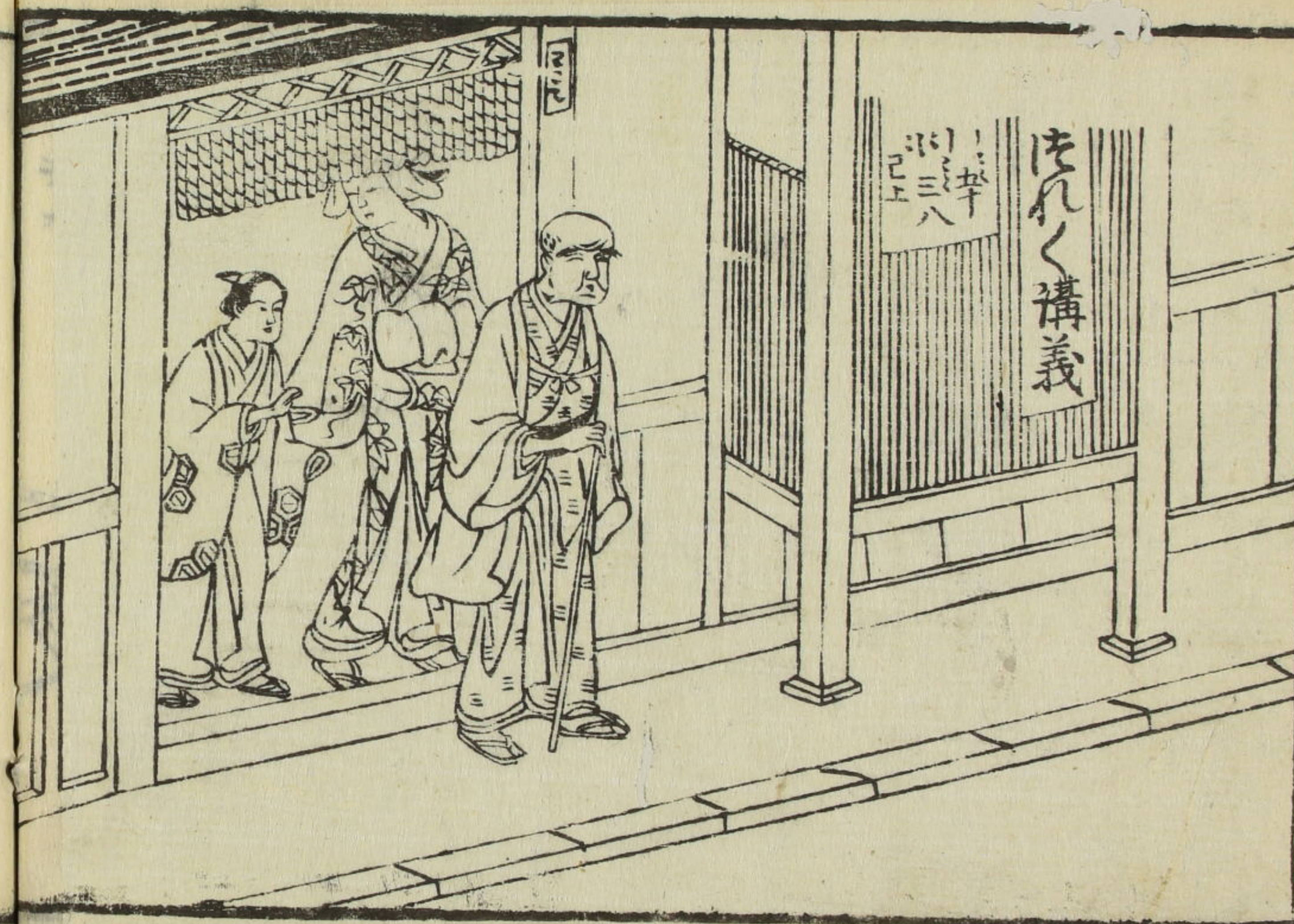
家おと初人れ。ま。ま。ま。の。あ。ま。い。も。

我身仇つゝ人の痛さをあはれむ人  
娘とて嫁ふ娘の老るハ稀をお  
いやこれとてもうつゝさぬやよん  
まもふはあし事あるんが下くの嫁  
娘運小申のようぬもこの老るふ  
嫁の又もいハすくまい物トやあし  
あまはたしかなともあてはのさあひ  
ハけふくひものトや。腰ちり顔ハ見  
若かり物トやと流石小恥りあも  
あまはたしかな。ひつひつむもねけ  
お毎小塩思懐なくの事もえて

病ぞけて病ぬやうふ成まゝとて乳者  
べのまにりてあまか。可くあまハ  
よるを底氣味もあまのやがる  
やふいひ。才一不恥一きハけとふ  
情むんる。己が死だう情ぞてわ  
娘の。あまののとゆるりてあまの  
向ふ根うがらぬるといハけ  
すのひがさう。結ぶすまじ又依平  
治とあやるといハけ。仕掛ひすまハす  
祈をいハけい娘の情けやあまの  
情あま。まぬ申がよけハあま

筆<sup>しつ</sup>くとかゆひ。やう天<sup>てん</sup>れもらう。  
 少<sup>ち</sup>と形<sup>かたち</sup>抱<sup>かか</sup>びぶぐもはあふされと。  
 ちくひふまらんをまひし。女<sup>おんな</sup>房<sup>ぼう</sup>ふ  
 氣<sup>き</sup>だらしとさかんとして。かつふこと  
 おいせしやうじびご。げひちりまわり  
 ばせとふされども。巨<sup>こ</sup>燈<sup>ちやう</sup>のあかり  
 かまれしりばくや女<sup>おんな</sup>房<sup>ぼう</sup>のひいさして  
 己<sup>おのれ</sup>まはとめさぬじびご。痛<sup>いた</sup>みに付<sup>つ</sup>起<sup>おこ</sup>る  
 小<sup>こ</sup>つ草<sup>くさ</sup>。家のやまをひらかろしげひ  
 秋<sup>あき</sup>去<sup>さ</sup>先生<sup>せんせい</sup>格<sup>かく</sup>のほあやしとうけし海  
 づ。屋<sup>や</sup>の隅<sup>すみ</sup>とわく見えは腰<sup>こし</sup>の内<sup>うち</sup>は





何なんも後のちの立たつめのいいよよ何なんも後のちと  
 ちちも何なんももひひんんどどおおいいはは何なんののが  
 ひひんんどどとと心こころいいややいいややいいややいいややいいややいいやや  
 爰こゝのの覚さめめたたららややううふふ今いまででははれれ不ふ成じやうはは  
 たた男おとこもも女めづめもも後のちのの乃のちととああららまましたした  
 我われ方かたててこころろ方かたととくくししゆゆののいいんん  
 手てとと扱あつかひひすすとと嫁よめ形かたちととああららてて  
 いいくくががいいかかししととばばまましてしてままががの  
 こころろいいららるるががいいははぬぬんんいいんんー  
 まましたした今いまいいひひ合あははれればばいいははるるが  
 姑おぢいいいららるるががいいももじじりりななるるハ

してはまをひとあうとめハ嫁を傍  
 づのにおとやとらぬちづてりまを  
 又何角おはけて気づびづと嫁いり  
 一いふ所の情いこくやう名深ぐ  
 のさるまじとろくとるあつて傍に  
 やくは姑おハ傍ましておいづまとい  
 づつづいづも何るもはを中てるふ  
 わを孝けする役の孝けハ取へ  
 上わあつと人あうとめと浅ては  
 毛人わまバ味方がしてゐるがわい  
 かじの人おいらとあさ嫁の方う

厚でほるやハ私のやうな姑でも  
 申のようおづいあひを女のは  
 かりなとそあいのいづり感  
 小人のわいもあんなのぞもいふ  
 孝けはせども向ふは嫁のする  
 一のいまがんのまひのでいあひあ  
 の孝けがたぬぬなりよあま  
 をほくせども向ふはけのあひの  
 ハけのまひのでいあひよあまの  
 實のたぬぬなりすいぶんをれ  
 志のまじり免とまじり分婦人



ハ悪病ありのよし。夜寝長のよし。  
まし垢づいことば。恥かきりさふらも  
多ども。け跡のよまてり。かお  
の垢付ことば。恥の人のすくか。髪  
うさちのえぐり。まじことば。まぢと  
りして。朝夕お楞。寝ふじひ  
たしけわども。心のきこあぐ。かく  
きことば。恥しいことば。けりぬや。け  
かんとす。人まぬけ。けまじき  
事いふも。いふわらひ  
我ん寝ふうの。りのあはば  
さぞやとぞこのえふくまじ

# 怒心

怒とりの我天より受ける  
まあるんよひきあてその  
忠のあよりあひそりしていやと  
かあるん人もいやありと知り  
てまじやわらひる人へあむ  
けぬるなり故ふ先か知と  
知り孫バあしぬありかんと

知るのバ忠とりの北西平に

かき申人の名姓とくらぶるふ

根がからひわうて末のこころ

こころいふまうで 一人旅の者緒

てにひきてるの北りんくひ

て苦難おそれ 出来の也ゆれば

ま居る事お我影果の志こ

あしきとりのあはれ必に思ふこ

やうの事といふに親不事ふハ

我子のあふとわきまこあつてハ

必父母とさやうの不孝いささひハ

きつとて親の内おふ命あなり

又と君親く子や影果がかやうに

致らんがせきとあつてあつて

とあつと能くしてと親へ事

まじ自ら忠孝とたるが夫婦

兄弟朋友と介世るの交りて

皆い忠とわい弘めて用いし

吾人もがーのいーなり

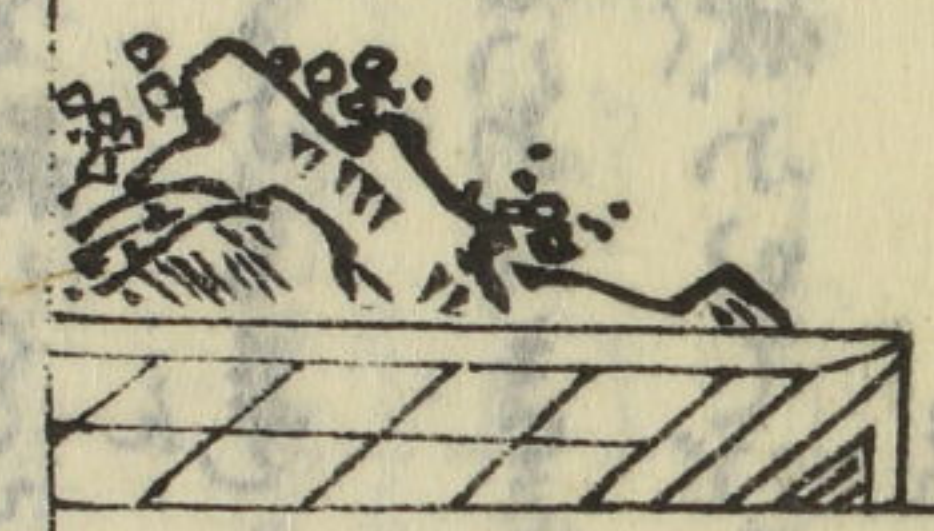
塙庵

戊子 十一

Vertical columns of handwritten Japanese text (kuzushiji) on the right page.



Vertical columns of handwritten Japanese text (kuzushiji) on the left page.



# 志

同我法人と救ひたき志あり  
これよえん  
 然もども先世の文を後世に  
まがくせん  
 知恵を力おけりも無造作に  
まがくしん  
 三の世を救ひてありや  
とく  
 法庵著いふも是なり戒秘傳云  
とく  
 苟も仁の志ありきとありと又  
うら  
 一日已が私欲おけて天下の人を仁  
いちじつ  
 に帰救せんとあり是又仏も回  
にき

弥勒菩薩の教はこれ一切の衆生の  
みろく  
 貧苦のを救ひてありと  
ひんく  
 不孝の子不忠の臣を不意あり  
ふこう  
 親をくま婦兄弟朋友法人を  
しん  
 罪非たせしはありとありとあり  
つみ  
 やりてやりたりと衆生小徹  
あつ  
 てあるのありとあり一心あり  
いっしん  
 のありとありとありのありとあり  
あり  
 一人の志を世と一休あり  
ひとり  
 して自ら世をすうあり  
して  
 とあり

石行廣略實之於身

# 新實語教

萬善木本語之於口

父之取貴者慈也

子之取貴者孝也

君之取貴者仁也

臣之取貴者忠也

事師長貴乎禮也

交朋友貴乎信也

見老者敬之

見幼者愛之

有德者年雖下於

我々必尊之

不肖者年雖高於

我々必遠之

慎勿談人之短

切勿矜己之長

讎將以義解之

怨者以直報之

人有小過含容而忍之

兄之取貴者愛也

弟之取貴者敬也

夫之取貴者和也

婦之取貴者柔也

人有大過以理責之

勿以善小而<sub>下</sub>不為

勿以惡小而<sub>下</sub>為之

人有惡則掩之

人有善則揚之

處公無私讐

治家無私法

勿損人而利己

勿妬賢而嫉能

勿逞怒以報橫逆

勿非理以害物命

見不義之財勿取

遇合義之事則從

詩書不可不學

禮義不可不知

子孫不可不教

奴僕不可不恤

守我之分者理也

聽我之命者天也

人能如是天必相之

此乃日用常行之道

若衣服之於身體

若飲食之於口腹

不可一日無也可不謹哉



貧福の功いんふくのこうりゆう

福の神ふくのしんいよく

一 小 一切いっさいすおと小て

二 小 にくにくでで慈いぬく

三 小 ささひひああそそんん

四 ツ ぐぐああままままて

五 ツ いいつつのの人ひとののううら

六 ツ ちちりりせせんん理りいいままに

七 ツ ちちよよくくままががええれれバ

八 ツ ややららららんんーーらら

九 ツ 子こららやや孫まごままででと

十 だだいいででささううらら

福ふくをを極きよくとと見みささいいか

堵庵

貧乏神いんぼうしんののいいままへ

一 小 いいららりりききささののああて

二 小 苦くががいい教おしけけままで

三 小 先さきづづりりどどおおりりて



我宗

三



我宗

三

一ツ 歌がふらさー  
 二ツ いつものたろいひで  
 三ツ びごいり知らす  
 四ツ ながけがひひか  
 五ツ 家内がむくくと  
 六ツ 小玄のき人まをく  
 七ツ さんと仕舞ふ  
 八ツ 貪欲と酒糸羽麻呂  
 九ツ いのすとも神やちん  
 十ツ 虚白齋

朝倉新話 廿四目

東郭子曰く世の上の人、欲と  
 捨くハ商人ハ高賣ハおらぬやう  
 小つやく。指さーやうう人まが  
 誤りてごごるハイそれと壁をて  
 いかくするよか。彼もかたは  
 通ふ。くハ幸くトされませ  
 としめ目も念がごごる。柳花  
 裏と人のをさしぬ程と神  
 つき出ーまーて我が新とれバ  
 こせ。茶湯とこーと。ありて

病がそれと回るまでいざい  
皆人も通うで我が是がふ  
すまばこそ令も殖まそ。おまひ  
命が。あかろひでござり。い我が  
まろくと一切我子です。や  
あつて病が。さ味好このま  
それ。我が肩のうひと。いよりの  
で。お力で。是が如何して。ゆく  
ものでござり。どひの。さうとや  
ござり。ぬら。さうとや。と。い。い。  
お力で。ゆぬ。その。と。や。と。い。い。

て。精も。おさんと。並て。い。ゆ。ぬ。は。い  
陸分。精と。入る。さ。い。い。さ。縁。が。な  
らぬ。い。只。歌と。ゆ。う。して。ゆ。と  
貪。う。り。お。は。北。乃。か。る。と。ま。れ  
換。か。る。の。い。止。さ。が。さ。と。い。う。の。だ  
ござり。い。高。貴。の。刺。も。え。ん。な。さ  
経。る。と。北。乃。と。い。い。ひ。ま。せ。ぬ。又  
紀。州。の。梳。屋。の。と。そ。と。や。と。い。い  
よ。を。食。ぐ。と。さ。う。と。さ。う。これ。い。い。さ  
し。や。と。と。どの。や。い。い。慳。貪。ふ。云  
ても。唯。と。い。う。で。忽。ち。さ。う。す。

たいそれでもみごと合てまゝ  
 が。却る皆人の憐とけ。後ハ  
 大ごごごごでも系族をやり格  
 小なりませし。みでござる。ハイ  
 高貴もいせうでござる。て欲  
 んと捨て出来ぬ。ゆゑのハご  
 ぎぬ。まゝござる。利とらるを  
 欲といひいませぬ。減直もいふが  
 欲んと。いふのでいこそ。ぬ。也  
 股と祿と。と。欲といひいませぬ。  
 大槩祿と。と。経のりハ祿と。

アさご好いハイ。減直もいふ。経と  
 云さご。よひハイ。それもわく。なつ  
 めつと。ふ。人の。祿と。と。かど  
 祿と。いひでも。大ご。なひる。で  
 ござる。ハイ。又。減直。法。歩。小。かけ。直。を  
 いふ。と。が。利。は。か。ら。い。でも。ご。ご。ご  
 ぬ。け。人。欲。と。捨。て。え。ま。ま。と。ま。や。  
 身一。銭。とい。ふ。もの。が。た。ひ。や。ふ  
 ち。ア。ま。す。我。が。た。ひ。の。人。家。男。を  
 毫一ハ。あ。ま。せ。ぬ。我。方。と。毫。せ。ぬ  
 小。う。つ。て。自。然。と。の。業。ふ。ま。

精せいかるハござらぬハイいちをり  
 家業かぎふハ精せいガ出いる人ひと才さいと榮耀えいよう  
 業いむ小こ持もたまへござらぬ才さいと  
 榮耀えい業ぎふむ小こ持もらぬふりて。  
 殖うふといあませぬども。あづき  
 殖うふふ殖ふる。乃なねせござらハイ  
 元もと来き才さいの歌うたガ。なひふしつと。  
 大だい合あ大だい酒しゆと。才さい持もを愛あいせり  
 やうハこさしぬ。そのをり養やしせが  
 一ひとひ由よし人ひと命いのちハ定さだまうと。あハ  
 福ふくども。たのつらうもうたうまで。

才さい又また才さいと老らうせぬふらうく。  
 家務かむもばくがあひ。務むもつく  
 かなひゆ人ひと家内けい内でハ人ひと老らういふ  
 才さい理りもござらぬ。世よの人ひと出いてハ  
 人ひと更さらふ才さい理り出いてハなひハイ  
 ドヤかあつて。家内けい内でも世間よかん  
 でも才さいガ。惣おんたまわらうがなぬ  
 是こゝでハ才さいもばくけしやふ。  
 ちつてどのやうか。じつしあ  
 親おやでも微わ笑わらまぬ人ひとハござら  
 ずい。海うみして世間よかん並ならひのり

大切不<sup>おほ</sup>き<sup>めす</sup>なり。た。お親<sup>おや</sup>なり。終<sup>はつ</sup>  
つて。候<sup>よう</sup>むし。や。ま。の。か。が。な。い。  
ま。せ。う。ね。この。海<sup>うみ</sup>うで。ご。ざ。り。て。  
人<sup>ひと</sup>歎<sup>なげ</sup>と。捨<sup>すて</sup>ま。さ。る。ま。り。だ。け。で。  
ご。ざ。り。い。を。と。捨<sup>すて</sup>ま。さ。る。ま。り。を。先<sup>まづ</sup>  
我<sup>わが</sup>が。な。ん。と。知<sup>し</sup>ら。ぬ。終<sup>はつ</sup>な。り。ぬ。ま。り。  
で。ご。ざ。り。我<sup>わが</sup>が。な。ん。と。知<sup>し</sup>ら。ぬ。て。え。  
ま。す。ま。り。や。お。と。り。の。ま。り。の。ご。ざ。  
ら。ぬ。我<sup>わが</sup>と。り。の。ご。な。い。い。お。  
ま。り。と。お。と。り。の。ま。り。の。ご。ざ。  
ご。ざ。り。ぬ。い。我<sup>わが</sup>と。お。と。り。の。ま。り。の。ご。ざ。

お。何<sup>なに</sup>が。歎<sup>なげ</sup>が。起<sup>おこ</sup>る。よ。ぞ。歎<sup>なげ</sup>が。お。け。  
ま。り。今<sup>いま</sup>の。ま。り。の。ま。り。の。ご。ざ。  
け。で。ご。ざ。り。い。の。ま。り。の。ご。ざ。  
皆<sup>みな</sup>な。ん。と。知<sup>し</sup>ら。ぬ。お。と。り。の。ま。り。の。ご。ざ。  
い。の。ま。り。で。ご。ざ。り。ぬ。い。の。ま。り。の。ご。ざ。  
ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ご。ざ。  
し。て。知<sup>し</sup>ら。ぬ。い。の。ま。り。の。ご。ざ。  
ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ご。ざ。  
感<sup>かん</sup>歎<sup>たん</sup>作<sup>さ</sup>礼<sup>らい</sup>。い。の。ま。り。の。ご。ざ。

天<sup>てん</sup>如<sup>にょ</sup>四<sup>し</sup>海<sup>かい</sup>天<sup>てん</sup>日<sup>にち</sup>香<sup>かう</sup>  
神<sup>かみ</sup>之<sup>の</sup>禮<sup>らい</sup>業<sup>ごふ</sup>未<sup>み</sup>達<sup>たつ</sup>

天明四歲辰乃春

恭敬舍蓋板

江戸日本橋南二丁目

須原屋茂兵衛

書林

大改心在橋通安堂寺町

秋田屋太右門

丹毒療治相傳

大やくだまふりト せんト也



丹毒療治相傳由来

信聞丹毒といふ病症ハ小児の身  
て大病とやんまけやを病よ予  
或片田舎に在丹毒療治の術伝  
付交せり云りといふと時なく  
むなしく年月を送り候ふ事  
比予ガ小児七才の秋家小發病  
い下りて腹の痛中ハ石の  
ことく小して苦患甚しく居る又  
志のむら子速醫師とまう絲きりに  
醫術入て是ハ必丹毒と云ん予  
カ小阿ははずといふと去り一貼を  
貼えんとせれ薬と用也といふと  
文小功なくすすく痛強アと  
其付予慈て傳受たり法伝

思ひ出右の療治と執せ初ひるふ  
かどなく後痛治りそれありく  
津射斗ふ本振す其時ハ死せると不  
再びおそれさせ又今年背の  
比予ガ二男六才ありこの右同病  
發病これハ是例のとやんまけんと  
察し右の療治と施し候ふは夜  
平愈せり其後あまこの醫師は  
丹毒のこと候尋ふにけんとお  
出合とと當業此カ小及がに  
返と治りぬ世百は病と今我  
失小兒を救と去るは津よ人の  
親の事候ふ切ありと察してハ  
け術の明く小功ありと人ふと慶  
去らせ余と救たく思ふは其

功と記はるを御尋く安くも功を  
 速に療あり而後石中玉妙之から  
 妙術と家秘して世小治りせざる  
 歎しく斯人の笑と顧く予がとき  
 愚輩の侍受と望むくあは侍を  
 何とさ記と記しゆるく若人く乃  
 つよ味ひ勇ひ治る予が珍ひは  
 せんとのなり

丹毒見立并療治方

此丹毒の病疔ハ其相教よりなる  
 宛初ふた右の耳及び頬乃色赤く  
 又赤黒く水とあやせれより咽喉  
 むけ其相教よりあり或は腹痛するも  
 何中或は西京と矢ふるや或は有  
 腹痛するは後くくたるとハ疔のなり

又後やうらうらと腹熱なるもあり  
 是は病の程き小寄りありけ病の候り  
 殺病一急に急に尤餘病も突きて  
 耳及び頬れ色と赤くと丹毒第一乃  
 疔立とほくしよくやと相一右の  
 相教も丹毒も是あは左右の  
 腕のうち臂の折のみと肩やこれ  
 其申子どとふどのちうらふとよ  
 正とくと思とかけ強く吸あり是  
 療治の法あり極き血をすまき  
 血血の二口二口宛宛血あり血  
 の出むと期と人たれ病のち  
 丹毒またれ療治とせバにのちと  
 丹毒しよと治す事神妙なり  
 十四經手之太陰肺經ノ國ノイ内ハ

雲門尺澤の間使白せの國の女  
内子高々し鳴呼宜あふふは御の  
娘の事月ひてかる旬

佐とやくこの附子達ちのまじりどふせ  
ちすのまじりどふせのまじりどふせ  
まじりどふせのまじりどふせ  
のまじりどふせのまじりどふせ  
かまじりどふせのまじりどふせ

江州大津扇屋關

# 桐傳 湖南亭

右桐所昇亭早くとまはれり名を  
ぬむふんれとと人けは法のけい  
為るんこと法款まてあり

此丹毒療治桐傳の書ハ予が  
知己湖南亭の施板あく阿  
ましく世ふりり月の人即ゆと  
ふ得る事ありれかま實まふ  
この予う存 知音の小児  
三四五人何れ丹毒とて醫療  
のまじりどふせ必死しりふ此  
妙法あり助命し友親家内  
の人れ悦かきりなり是ハ  
まのあり予がまじりどふせけ  
外字付りよやく小功とゆ  
速く治ふ此度此中のまじり  
つふ加つて世ま終もいろく  
せハ彩玉御南亭のまじり  
助の端まふんく細字

丹書

かろくしつもん文小志のせり

書林

大坂心齋橋安堂寺町南  
秋田屋太右衛門

